

『沈黙の春』出版 60 周年記念イベント 感性の森～演劇と音楽とセンス・オブ・ワンダーと～ 活動報告

7月8日(土)に開催された劇団オーガニックシアターさんとのコラボイベント「感性の森～演劇と音楽とセンス・オブ・ワンダーと～」は、私たちと同じように、夢や希望を昔から語り継いでいる芸術家や音楽家の仲間と手を取り合って実現したイベントでした。

第一部は劇団オーガニックシアターの音楽朗読劇「レイチェル・カーソン物語」(監修:上遠恵子)。脚本・演出・主演のナガノユキノさん(以下、ユキノさん)の演じるカーソンはまるで本物のカーソンのよう。そのカーソンが目の前でポール・ブルックス(青沼かづまさん)と会話をしている。時は『沈黙の春』出版当時の頃。本の中でしか知らなかった空想の世界が時空を超えて目の前の舞台上で展開されている。そして観客の私たちもその世界に引き込まれていく・・・そして、スピードと物にあふれた現代社会の病をRIMAKOさんの軽やかなピアノのメロディーに乗せて歌声が響き渡り、センス・オブ・ワンダーの朗読が重なる。♪急ぎ過ぎです。♪多すぎます。♪喜びを味わう時間を下さい。更に私たちの願いを載せた歌声が会場の皆様の思いと重なっていく・・・♪もう一つの別の道を探しましょう。私は劇中歌に出てくる「地球に恋をする」という言葉がとても好きです。いつまでも大切にしたいかけがえのないもの。というユキノさんの思いが、この一言に込められているような気がします。これからもずっと語り継いで欲しいと願わずにはいられませんでした。

第二部はナガノユキノさんと上遠恵子さんの対談。この対談をどれだけ多くの方たちが待ち焦がれていたのでしょうか。でも誰よりもそう思っていたのは舞台にいる20年来の親友のお二人に違いありません。終始嬉しそうに感情がほとぼしるように語るユキノさんと感情を内に秘めて静かに熱く語る上遠さんのお話しは、まるで二人のカーソンが語り合っているかのようなようでした。それもそのはず、ユキノさんが演じたカーソンのモデルは上遠さんだったというお話を聞いてとても納得しました。「もっとワイルドに、声を上げよう!」「一人一人が自分の頭で考えて自分の言葉で語ろう!」「もっとたくさん人と会話をしよう!」というメッセージが心に響きました。

第三部はチェロとピアノの共演。チェリストの辻本彩友子さんの選曲は、レイチェル・カーソンに敬意を表して自然をテーマにした曲。このイベントのために森本二郎さんが提供して下さったスライド写真と見事にマッチしていました。オープニングは「鳥の歌」(パブロ・カザルス)。1945年に初演され、国連でも演奏された平和への祈りの曲です。続いて日本のスタンダード「浜辺の歌」と「川の流れのように」。ゆったりとした美しいメロディーに身をゆだねると自然の情景が目に浮かびます。エンディングは大自然をテーマにサウンド・オブ・ミュージックのメドレー。「タイトル曲」～「私のお気に入り」～「全ての山に登れ」。アンコールは今回のイベントのテーマを象徴するような曲「ユー・レイズ・ミー・アップ」でした。「全ての山に登れ」は『人生で何度も直面する困難なことから決して逃げずにその都度立ち向かっていきなさい』という歌。「ユー・レイズ・ミー・アップ」は、『私

私たちは一人じゃない。みんなで力を出し合えば、嵐の海も乗り越えて行ける』という歌。どちらの曲も別の道を歩もうとしている私たちや会場にいる全ての人たちへのエールのような曲。誰もが勇気と希望を胸に刻み、みんなの心が響き合った感動的なフィナーレでした。

当日は私たち関東フォーラムも、会場内でパネル展示、書籍の販売、関東フォーラムとして初めての環境保全活動となるモナーク蝶救済募金を行って会場を盛り上げました。テーブルや椅子を移動してみんなでカフェを会場に作り替えたことも初めての経験でしたが、スタッフ全員の力を結集したこうした手仕事は何よりも実り多き経験となりました。

このイベントに関わっていただいた全ての方、応援していただいた全ての方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(文責：柳澤 征克)

